吸血鬼の永い夜

みね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼の永い夜

【Ｎコード】
Ｎ９９３９Ｒ

【作者名】
みね

【あらすじ】
吸血鬼と人間のハーフである天夜薫は、ある日姉の敵（かたき）だと喚く女子高生に襲われる。
心当たりのない天夜薫は無実の罪を晴らすため、その犯人探しに協力することになるのだが……

金色の眼（前書き）

厨二全開、厨二上等の異能力バトルラノベです。
定期的に更新できればなー、と思ってます。

金色の眼

俺の父親は吸血鬼だったらしい。
らしい、と言うのは俺の記憶の中に自分の父親の姿がほとんどないからだ。
俺が物心が付くか付かないかの時に家を出ていって、それっきりなのだと母親は言っていた。
じゃあ、どうして吸血鬼であるかを知ってるか　だって？
それは他でもない自分自身の身体がそれを証明しているからだ。
並はずれた身体能力と自然治癒力、特異な視力、そして幾つかの吸血鬼特有の技能……
そういった様々な要因が、自分に吸血鬼の血が入っていることを証明していた。
とは言っても、所詮はハーフ。オリジナルの奴らと比べれば、人間との差異はちっぽけなもの。
でも、そのお陰で吸血鬼である制限を、受けなくて済んでいたりもする。
例えば太陽光、十字架、ニンニク、吸血衝動。
そんな弱点とも言えるもののないお陰で、何とか人間として普通の生活を送れていた。
あの日まで……

○

あの日。俺があの女に襲われた日は、まだ記憶に新しい。
ブラブラと街で時間を潰した後の学校の帰り道だった。人通りのない静かな住宅街に入り、タラタラと俺は歩いていた。
時間は夕方６時頃。季節は初夏。前に伸びる影は身長の倍ほどに伸び、茜色に染まった景色は、どことなく切ない気持ちにさせる。

平和な帰り道……のはずだった。
その平和をぶち壊すような、背後からの殺気に、瞬時に俺は腰を落とした。
ついさっきまで自分の首があった位置を刀が通り過ぎていく。
間一髪。普通の人間の反射神経だったら間違いなく死んでいる。こういう時ばかりは、吸血鬼の血に感謝せずにはいられない。
そんな事を思っているのも束の間。第二撃が俺の身体目掛けて振ってくる。
続いて三撃、四撃、五撃。四撃目が頬を掠りはしたが、俺は何とかその襲撃者の間合いから脱出することができた。
「天夜薫さん、とお見受けしますが」
襲撃者は淡々と言う。どう考えても、それは襲った後に言う台詞じゃ無い。
「ああそうだ。どこの誰かか知らないが、随分とご挨拶だな。危うく死ぬとこだったぞ」
そう言いながら、頬に手を当てる。手のひらに付く鮮やかな赤。
どうやら、あの刀は本物らしい。しかも掠っただけでこの切れ味とは、なかなかの業物だ。
「もちろん殺すつもりでしたから」
シレッと襲撃者は言う。
襲撃者の年齢は15歳くらいだろうか。ショートカットが良く似合う、さっぱりとした少女だった。
ただ見覚えがまったくない。だから、もちろん恨みを買った覚えなどないわけだが……
「一応聞いて置くが、俺に何か恨みでもあるのか？」
「ええ、あなたに姉が殺されました」
まったくの濡れ衣だった。少女の事も知らなければ、姉のことも知るわけがない。
「身に覚えがないな。とりあえず、名前を教えて貰えるか？」
もしかしたら、何か小さな心当たりがあるかもしれない。

「何をヌケヌケと……」
「良いから名前」
「神山凛華。あなたの殺した神山麗華の妹です」
聞いたことが無かった。姉も、そこにいる妹の名も。
「お前の名前も知らなければ、姉ちゃんの名前も知らないぞ、俺は」
「名前も聞かずに姉を殺したのですか！　許せない！　女なら誰でも良かったんですね！」
そう言って神山は勝手に憤る。どうかしてやがる。
こう言うヤツにはいくら言っても無駄だ。力で……教えてやるしかない。
俺は地面を蹴った。一気に間合いに入り込み、（女の子を殴るのは少々気が引けるが）懐に拳を放……てなかった。
拳は空を切った。ありえない。そんなことはありえるはずがない。
吸血鬼の打撃を、身体能力で遙かに劣る人間がかわせるはずが……
「吸血鬼……と言っても大したことはありませんね」
落胆にも似た神山の声。
その刹那、体勢の崩れた身体に痛みが走った。腹部から出血。幸い大して深くはない。これくらいなら容易に再生が……
そんなことを考える暇を彼女は与えなかった。
「っ！」
襲いくる刃の雨。俺はまさに死に物狂いでかわし続けた。
神山の剣筋は完璧だった。隙がないために反撃に移れず、甘い入りがないため間合いを取ることもできない。
人間業じゃないと思った。化け物。人のことを言える身ではないが、彼女は間違いなく化け物だった。
「ちっ！」
もはや敗北は必至。彼女の人間離れした剣の運びは徐々に俺を追い込んでいった。
そして、あろう事か俺の中に隙が生まれた。
彼女の目を見てしまった。

綺麗だった。そして異常だった。金色に輝く特殊な虹彩は、宝石などと言うチープな形容では申し訳ないほどの美しさがあった。
俺は思い出した。人間の中には特異な力を持つ者がいる、という話を。そいつらは化け物と対等か、それ以上に渡り合える。どういう能力を持つかは知らないが、人間離れした剣運びはコレのせいなのだろう。
納得がいった。でも、納得がいった時にはもう遅かった。
「ぐあっ！」
腕が斬られた。右。利き腕だ。
だが、ヤツも人間の端くれ。右腕を斬った後に若干の隙ができた。
俺はその隙を見逃さなかった。
地面を蹴り、大きく後退する。名誉ある撤退。……仕方ないじゃないか。
そして、傷口を見る。二の腕から下がない。これは結構再生に時間が掛かりそうだ。
3分くらい……だろうか。
「……その程度、ですか」
先に口を開いたのは彼女だった。
「悪かったな。その程度で」
右腕を庇い学生服の袖の中にしっかりとしまう。
「あなたに姉が殺せたとは、姉もよっぽど油断をしていたのでしょうね」
「だから、俺じゃないって言ってるだろ」
コイツは仮定と事実がゴッチャに成っている。冷静な女のように見えるが、実際の所かなり不安定なのかもしれない。
……ならば、突き崩す術はありそうだ。
「あなた以外にはいないんですよ。吸血鬼さん」
「……なぁ、そもそもどうして俺が吸血鬼だって事を知ってるんだ？」
「調べたんです」

おいおい、アレは調べて出てくるような情報じゃないはずだろ……
「どうやって？」
「知り合いのツテですよ。さあ、お喋りの時間は終わりです。さっさと死んでもらいます」
「……だったら、調査不足だな」
「何？」
ほんの少し神山の顔が引きつる。
「たぶんその知り合いから、日本吸血鬼協会について聞かされたんだろう？　で、名簿を見たら近所に住んでる俺の名前を見つけたわけだ、違うか？」
「……ええ、その通りです。意外に頭が働くんですね」
「そうして俺が犯人だと決めつけた。だったら、ツメが甘い甘過ぎる」
「どうして？」
苛立ちを含ませながら彼女は言う。
「俺についての調べは、まあ、よくやったんじゃないか。学校も住所も特定し、この人通りのほとんどない住宅街を戦場に選んだ。なかなかセンスがあるよ。だが、お前は日本吸血鬼協会、いや吸血鬼自体についての調べは、まったくしてなかっただろ。たぶん、人に害を及ぼす化け物くらいにしか思っちゃいないんじゃないか」
「！？」
図星だった。苛立ちと驚愕の混じったような顔をしてやがる。
「でも、そんなの関係ない。あなたが犯人であるのには違いがないんだから……」
「日本吸血鬼協会は何も吸血鬼がみんな仲良く頑張りましょう、なんて目的のために作られた組織じゃない。吸血鬼を監視するための政府の組織なんだよ」
「だから、それが何なんですか？」
その苛立ちは今にも爆発しそうだ。それはもはや俺に対するものではなく、自分自身に対するものに代わりつつあった。

「吸血鬼は危険だからな。明治政府ができてすぐに管理されるようになった。そして、問題が起きるとすぐ……何の慈悲もなく、簡単に殺されたんだ。それは今も変わらない。俺等にはほとんど人権なんてない。勝手に移住する権利もなければ、好きな職業に就く権利も旅行する権利もない。結構不自由な身なんだよ」
ハーフの俺はその管理も若干軽いんだけどな。
「でも、鬼のお上も食い物だけは与えてくれた。配給制でな、死刑囚や死んで間もない死体を配ってくれるんだ。それで吸血鬼は飢えを凌いでいるわけさ。」
「だから、人は殺さないって言うの？」
「ま、そう言うことだ。危険な化け物吸血鬼は、ちょっと疑わしかったらすぐ殺されてしまうんでね。色んなリスクを犯してまで、人を殺そうと思う奴はいないんだよ。それに……これは俺に関してだけど」
決定的な言葉を俺は投げつける。
「名簿に書いてあったと思うけど、俺はハーフなんだ。ハーフに吸血衝動も食人衝動も無いんだよ」
「……」
「だから、人を殺す理由が俺にはない」
「……」
沈黙。彼女は何を考えてるかまったく読めない表情でぼんやりと俺を見ている。あの美しい金色の虹彩を持つ目で。
「……そんな嘘が通じると思ってるんですか？」
やっと口を開いた神山はそんなことをぬかした。しかも笑みを交えながら。
あくまで自分の非を認めないつもりらしい。
「そもそもあなたが犯人でない証拠がない」
「じゃあ、俺が犯人である証拠があるのか？」
ピクリと彼女の形の良い眉がひくついた。
「う　る　さ　い！　この期に及んで言い逃れとは……醜い醜い醜

い！　謝罪の一言でも言えば、すぐに楽にしてやるものを！　殺してやる！　臓物を全部引きづり出して、脳漿を撒き散らし、姉さんと同じように殺してやる！」
完全に冷静さを失っていた。
壊れている、と思った。たぶん、この女は恐ろしく激情型なのだろう。姉が死んで不安定になってるからか、もとからなのかはわからないけれど。
「何を言っても無駄か」
思わず笑みが零れた。勝機が見えたのだ。
俺は再び地面を蹴った。左の拳を彼女の脇腹に向けて放つ。神山は刀を使い、完璧なガードの体勢に入る。
そう、完璧な、まるで右側からの攻撃を考えてない完璧なガード。
なぜなら、俺の右手はつい先ほど斬り落としたされたから。だから、右のガードは必要ない、と彼女は考えたのだろう。
それが人間相手だったら、実に賢い守りだと思う。左の拳も無効化させることができるんだから。
でも、生憎俺は……吸血鬼だった。
左の拳を急停止させる。
そして
右手の拳を振り抜いた。
「がはぁっ！！」
彼女は一、二歩よろめいた。
今日初めての大きな大きな隙。俺がそれを見逃すはずがなかった。
すかさず彼女の手首目掛けて蹴りを放つ。
カランコロン
刀が地面に落ちる。俺はすぐさまそれを拾い、ようやく顔を上げた彼女に突きつけた。
「ゲームセットだな」
「くぅ……」
悔しさと痛みに顔を歪めている。

実際、力も抜いたし急所にも当てていないから、痛みはあっても大した怪我ではないはずだ。
「先に言っておくとお前を殺すつもりはない」
目の前で見た神山凛華の顔は、かなり綺麗なものだった。
不思議な虹彩を持つ金色に輝く大きな瞳に、小さく整った可愛らしい鼻、ピンク色の瑞々しい唇。
余裕が無くて全然気にも留めていなかったが、かなりの美少女だ。
道ですれ違ったら、思わず振り返ってしまうほどの。
「……」
「謝れば許してやるよ」
「……もし謝らなければ？」
「刀をへし折って、そのまま帰る」
「逃がしたら、またあなたを襲うかもしれませんよ？」
「それでも良い。俺は人殺しなんてしたくない」
そして、それが俺の無実の何よりの証明になるだろう。
「……それで自分の無実を証明したつもりですか？」
「ああ。俺はお前が納得するまで、何度でも証明し続けるつもりだ」
金色に輝く瞳に俺ははっきりと言った。瞬間彼女の瞳が揺らぐ。もう一押しだ。
「あなたが犯人で無い事を信じてしまいそうです」
「だから、俺は犯人じゃないって何回言ったら……」
はぁ、と大きく溜め息をつく。一体どうすれば、俺が犯人であるという考えを改めてくれるのだろう。
「一応聞くけど、どうして吸血鬼の仕業だなんて誤解をしたんだ？」
「誤解じゃないです。吸血鬼の仕業なんです」
「いい加減、自分の間違いを認めろよ！」
何だかもう警察に突き出すくらいしか、方法が無いような気がしてきた。
「間違いを認めるには証拠が必要です。天夜さん、あなたにはその証拠がありません」

「だから、俺が犯人であるという証拠はどこにあるんだよっ！」
何というデジャブだ。さっきから一歩も議論が進んでいない。
ただ、変わったのは殺気が消えたことか。彼女もすぐに俺を殺すつもりは無くなったらしい。話だけは聞こうと思ったようだ。
見れば、虹彩の色も黒になっている。戦闘状態を解除したということか。
「あなたが犯人でない証拠がないのが、何よりもの証拠です」
「何という水掛け論……」
終わらねぇ。俺が犯人でないことを証拠なんてあるのだろうか。
「そうだ。アリバイだ！　お前の姉さんはいつ殺されたんだ？」
「警察の検視結果によると、正確なのはわからないそうですが、二週間前の土曜日の夕方から夜にかけてだそうです」
そう言う彼女の顔は少し苦しそうだった。そう言うことを思い出すのは、精神的にもかなりキツイのだろうか。
「二週間前の土曜日か……」
俺は何をしていただろうか……。
手帳など持ち歩かなければ、予定を何かに書き込むくせのない俺にはわかるわけがない話だった。
「わからない」
「やはりあなたが犯人でしたか」
「だから、何でそうなるんだ！」
是が非でも彼女は俺を犯人に仕立て上げたいらしい。
しかし、本当に一体どうしたら良いんだろう。そもそもこんなキ○ガイを納得させるなんて、できるのか。
「……証拠を出す以外に俺が犯人でないと認めてくれるには、どうしたら良い？」
なぜか下手に出てる自分に悲しくなった。
「そうですね」
ありません、と言い切るかと思ったら、彼女は可愛らしく顎に手を当てて考え出した。

正直、こういう動作が自然にできちゃう女の子はすごく可愛いと思う。
「別の犯人を探し出してください」
言われてみれば、それは一番手っ取り早い方法だった。ただ、手っ取り早いと簡単は大きく違うが。
「なるほどな。犯人探しを手伝えば言いわけか」
「まあ、あなたが犯人なら、これは徒労以外の何者でもないわけですけど」
「安心しろ。俺は犯人じゃないから」
「……わかりました。とりあえず、容疑者に格下げしておきましょう」
「それでも容疑者かよ……」
殺されなくなっただけマシか。
「で、容疑者として聞くが、どうしてお前は吸血鬼の仕業だと思ったんだ？」
ようやく初めの質問に戻ることができた。長い……長過ぎる……。
「それは……」
少し神山は言い淀む。その顔も憎しみと悲しみが混ざったような、複雑な表情を浮かべている。
「姉の死体が食べられていたから……」
「食べられていた？」
「はい。胸から股まで裂かれ内蔵が食い散らかされてました。それに頭も……」
ギュッと両手を握りしめて、吐き出すように神山は続けた。
「目はえぐり出されて、口と鼻はただの一つの大きな穴にされて、頭蓋骨は叩き割られてその中身を全部……もうまったく原型をとどめていなかった……」
「そうか」
悪いことを聞いてしまったと思った。彼女の表情はあまりに悲痛だったのだ。

思い出しただけで怒りやら悲しみやら嘆きやら、自分でも抑えられない大きくて暗い感情が沸き上がるのだろう。敵(かたき)を取ろう、とやっきになるのもわからなくはない。自分も身内がこんなような殺され方をされたら、我を失ってしまうに違いない。

「その事を仲の良い友達に話したら、吸血鬼と日本吸血鬼協会を紹介されたんです。吸血鬼は人を食べる最低の化け物だって」

「ったく、酷い言われようだな」

知識が足りないのを偏見で補うのは、迂闊過ぎる。

でも、自分でも甘いと思うのだけど……助けたいと思ってしまった。

「まあ、でも、そう言うことなら力に成れると思うぞ」

「本当ですか？」

ほんの少しだけ表情に明るさが戻る。

「ああ、そういうのに詳しいヤツを知ってるんだ。どうする？　今から行くか？」

「今から、ですか？」

そう言って、ポケットから携帯電話を取り出す。

「門限過ぎそうなので、母に許可を貰ってきます」

そう言って、俺から少し距離を取る。門限を律儀に守るとは、ちょっと思いこみが激しく頑固なところはあるが、真面目な学生なのだろう。

「大丈夫でした。えーと、どこに行くか聞いてもよろしいですか？」

電話を終えて戻ってきた神山の目は、警戒の色を滲めませている。

そういえば、まだ俺は容疑者だったっけ。

「天狗山の一峰神社だよ」

「あの山にある神社ですか。……っと、こんな時間に山に連れて行くなんて……」

言いながら神山は顔を真っ赤に染めていく。

「人目につかないとこで乱暴してそのまま殺す気ですね。危ないところでした。危うく引っ掛かってお姉ちゃんのようにされてしまうところでした」

「……何なら今殺してやろうか」
一応、刀が突きつけられている状況だってことを、コイツはわかっているのだろうか。
「くっ……あなたに汚されるくらいならば、潔く死を受け入れましょう」
目を瞑って、神山はグッと堪えるような表情を浮かべる。嫌われてるなぁ、俺。
俺は大きく溜め息をついて、色々と諦めることにした。
「殺す気も乱暴する気もねぇよ。一峰神社の巫女とは幼なじみで、そういう事件なら何か知ってるかと思ってな」
一峰神社の巫女であり、俺の幼なじみの姫川弥生は、その筋では結構名の知れた人物らしい。
何でも彼女に視て貰うために、わざわざ隣の県からやってくる人もいるとかいないとか。
そんなんだから、人を食らうような化け物が出たのなら、彼女の耳に入っているに違いない、と思ったのだ。
「そ、そうならそうと言ってください。変な誤解をしてしまったではないですか」
さらに顔を真っ赤にして神山は言う。話す前に妄想を膨らませ始めたのは、お前だろ。
何というのか、先が思いやられる反応だ。

金色の眼（後書き）

ご意見ご感想等ありましたら、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9939r/

吸血鬼の永い夜

2011年10月8日20時49分発行